



齊藤隆弘

「図像・動作情報のデジタル入力について」

川田順造

「非文字資料の諸相とその研究法 人類学の立場からの問題提起 音文化、身体技法、道具、感性等の領域」

河野通明

「身体技法・感性を手掛かりとした古代日本列島の多民族状況の検出の模索」

この他、全てを紹介はしないが各班はそれぞれ研究会を組織、開催しており、研究活動は活発に展開されているとあってよいであろう。

## 6 おわりに

以上、本プログラムの拠点推進事業組織について述べてきたように、事業そのものは比較的順調にすべりだしたとあってよいが、組織的な面でなお検討を要する問題も

残っていることも事実である。それは、この事業を遂行する過程で基盤となっている大学院研究科、専攻、研究所の強化を図ることは当然であるが、最終的に非文字資料の蓄積したデータの管理や研究の継続をどう保証するかという問題である。本プログラム担当者が構想している非文字資料研究センターを全学の組織体制の中にきちんと位置づけるためには、なお全学的調整が必要であるが、その点、学長の強い指導性が期待される。また、現在、学長から全学に提起されることになっている「研究支援センター」との関連も明確にしてゆかなければならないだろう。

ともあれ、本プログラムが開始されたことによって、本学全体の研究・教育体制のさらなる活性化の問題意識が、全学的に共有され、その方向に一步踏み出し始めたことは事実であり、その一步が文部科学省の21世紀COEプログラムの期待する方向に沿うものであることはまちがいないであろう。

### 研究組織図

